飛行第５５戦隊

前　田　勝　美　さん

戦争も終わりに近づいた昭和２０年３月，我が整備隊は三重県の明野（あけの）飛行場より第六航空軍に転属の命令を受け，福岡へ行くと更に配属先が鹿児島の飛行第５５戦隊と決まり，列車で知覧の飛行場に着いたが，そこには戦隊はいなかった。

幸いに憲兵隊があり尋ねると，川辺郡の万世町（現南さつま市）に飛行場（当時軍の機密飛行場）があることが分かり軽便(※1)鉄道で移動したが，整備隊は数人に分かれての民宿で飛行場へ往復していた。格納庫は爆撃でなくなり，滑走路の先に堤防が有って外は海だった。この堤防がのちに悲劇を起こすことになる。ある朝，飛行場に行くと，海軍の一式陸上攻撃機が不時着しており，乗員はおらずそばに小便の入った一升(※2)瓶が転がっていた。

この「一式陸攻」が水島で作られた事は戦後復員して分かった。またある時，米国製の「ボートシコルスキー」戦闘機が，オイルを機体に流しまっ黒になり，滑走路沖の海岸に不時着して乗員が逃げる所を逮捕したこともあった。またまたある日は，我が戦闘機（三式戦闘機キ６１飛燕（ひえん））が次々と離陸している時，１機が堤防に接触し火を吹いたので乗員を助けようと近づくと，弾倉に火が移り２０ミリの機関砲弾（２０ミリ以下は銃と言った）が四方に飛び近づけなかった。

戦況ははげしく，全国の古い機体や満州にあった練習機も特攻用に爆装（無線機，機銃を下し５０キロ爆弾を吊（つ）る）して出て行った。我が５５戦隊は特攻機を援護して沖縄

まで送るのが任務だった。夜は小学校で映画を町の人と見た。また，町長さんの家でバケツ一ぱい芋飴(※3)を貰(もら)ったことも。ガソリンが無いので動かなかったダットサントラックも飛行場通いになった。

薩摩(さつま)に少しは馴(な)れた頃，沖縄戦が終わり，我が５５戦隊は元の小牧飛行場（名古屋）へ引揚げたが，終戦を前に最後の移動で大阪の泉佐野飛行場（現関西空港の入口）へ行き，戦は終わった。全機プロペラを下し車輪を外して復員の日を待つ事になる。

鹿児島弁を披露しよう

「おまんさーわ，がっついよかにせど。」

（あんたはぼっけえ男前じゃのう。）

※1 軽便鉄道…軌道が狭小で，小型の機関車・車両を使用する鉄道。明治４３年から大正８年まで，鉄道敷設法によらないで建設された鉄道。

※2 一升瓶…酒などの液体が一升（約 1.8 リットル）入るびん。

※3 芋飴…蒸したサツマイモを原料として，麦芽などを加えて煮詰めて作った褐色の飴。